

訪問看護師の判断力を養う 研修が開催される!

編集室

2025年8月9日(土)に、在宅現場で活動する看護師の判断力を磨くことを目的とした研修が、神奈川県看護協会で開催されました。本研修は、本誌の連載から生まれた書籍『在宅ケアのための判断力トレーニング』(医学書院)を基に企画されたものであり、参加者からの好評を受け、2022年より企画されている人気の研修です。講師は同書著者の清水奈穂美氏(佛教大学保健医療技術学部看護学科在宅看護学准教授)が務めています。本稿では、研修の模様をお伝えします。

訪問看護師の判断力を支える思考サイクル

当日は会場とオンラインのハイブリッド形式での開催となり、会場では9名、オンラインでは63名の研修受講者が参加しました。

研修は二部構成であり、第一部では、講師の清水氏から研修の目標が共有された後に、訪問看護に必要な判断力の概要が解説されました。清水氏は、例えば療養者の排便が3日間なかった場合に、「便秘かもしれない。下剤が必要か?」と考えるのは「思う」なのに対し、便秘の原因を考えて腹部症状や水分・食事摂取量を観察する過程を経て下剤の要不要を選択するのが「判断」だとし、訪問看護師には思考プロセスを経て断定する「判断」が必要になると解説しました。

続いて、清水氏は訪問看護師の判断力を支えるのは、①手がかりを感じとる力、②見えないことを推論する力、③考えを言葉にする力、④余計なことをしすぎない力、の4点だと強調し、①～④を統合して療養者にとっての最善の選択を支え、導き、意思決定を共有する思考サイクルが訪問看護では重要だと説明しました。その後、背部に褥瘡ができてしまった多系統萎縮症の療養者の事例が示され、前述の思考サイクルに沿って、同事例において判断すべきポイントを全体で検討しました。そして、訪問看護師は看護実践の場面を語り、捉えた事柄とその時の気持ち、関わりの中でどのような判断をしたのかを自らに問いかけて考えることが重要だとしました。



第二部のグループワークの様子。提示された事例において、初回訪問時の対応を検討している。

判断力を鍛える方法としての「臨床推論」

第二部では冒頭で、訪問看護師の判断力を鍛える方法として、「臨床家の戦略的思考」である臨床推論が挙げられました。在宅現場では医学的根拠に基づく予測的判断と療養者の価値判断をすり合わせる必要があります。看護師にはあらゆる情報を統合し、分析的に判断する思考力(≡臨床推論)が求められると言及されました。

その後、「乳がんが再発し骨転移が見られ、外来化学療法・疼痛コントロール中の73歳女性療養者」という事例が共有され、数名ずつのグループに分かれて、初回訪問時の対応について話し合いました。各グループでの議論が終わった後に、グループ内で話し合った内容を互いに発表し、研修は終了しました。

参加者からは「書籍を購入していたこともあり、判断力や臨床推論というテーマを見かけて受講した。参加してよかったと感じた」「4月に病院から訪問看護に転職したばかりで、1人での訪問が不安だった。訪問時に自分が悩んでいることを人に伝えて語り合うことの重要性を感じ、また悩みを持つことは恥ずかしいことではないと気づき、日々のモチベーションになった」「自分が所属する訪問看護ステーションでは、お互いの経験を共有する場がありませんので、今後はそうした時間を意識的につくろうと思った」といった声が聞かれました。

*

研修受講者は充実した時間を過ごせたようでした。本研修は今後も開催予定であり、神奈川県看護協会に入会していない方でも参加可能ですので、興味のある方は受講してみたいかがでしょうか。詳しくは神奈川県看護協会の公式ウェブサイトをチェックしてみてください。

